ブッククラブ回に取材に行ってきました！

Q 以前お店を訪れた際、「本屋さん」という看板表示が他の書店に比べ少ないように感じました。何かこだわりがあるのでしょうか？

A特にこだわりはなく、看板を大々的につけるのはテナント主からNGと言われているからです。そのため、もう少しわかりやすく路面に表示ができればと考えています。現在は店内の照明を落としているためお店の様子が外から見て見えづらくなっていますが、照明を明るくすれば窓に書いてある店名のレタリング等が見やすくなると考えています。

Q 書籍の配架方法やお店の内装（階段を下ると書棚が広がる作り等）について、他の書店ではあまり見かけないつくりだと感じました。なにかこだわりや工夫はありますか？

A 一般の書店や図書館であればジャンルごとに本が分かれていますが、ブッククラブ回ではあえてジャンル分けをしていません。お客さんが来店して直感的に気になった本を１冊手に取り、その本の周辺にその本につながりのある本を置くことによって、興味のある１冊からスピリチュアルな世界を探究してもらいたいという思いで配架をしています。一般的な図書館での９分類に分かれた配架法ではなく、HPのカテゴリーにあるようにブッククラブ回独自のカテゴリー分けをしています。階段に置いている書籍は、新しく入荷した本や、メルマガにて紹介した本を置いています。そのため、常連さんでも来店するたびに見てもらえる書棚になっています。本の入れ替えも頻繁に行うよう心がけています。

Q 以前お店に訪れた際、スピリチュアル・哲学・宗教にまつわる本が選書されていると感じましたが、選書の基準について具体的に決まっているのでしょうか？（その際には、こういったジャンルの書籍は選書しない、といったルールを定めているかについてもお伺いしたいです。）

A オリジナリティがある本を１冊１冊選ぶようにしています。オリジナリティのある本というと人によって捉え方が変わってきますが、ブッククラブ回では読むと力強さを感じることができるのみならず、感じ方も異なると考えています。開店当初に選書したオリジナリティある本から現在に受け継いで選書を続けています。また、当時選書した本の出版社や個人で出版されている方の本を現在でも選書しています。
また、作家さんから派生して選書する場合もあります。新しい本も取り入れていますが、どの本も全て取次の方から本を置いて欲しいという依頼を受けるのではなく、１冊１冊出版社の方に注文しています。そのため、返品の業務がない分、より発展的なことに時間が割けるということにもなります。

Q 商品の入れ替えは行っていますか？行っている場合はどれくらいの頻度で行っていますか？

A 定番的な本は存在しますが、本を置くスペースにも限りがあるため新しい本を入荷したら、その分ずっと置いている本を動かすことがあります。入れ替えは不定期で行っています。
少しずつ本を入れ替えることが多く、ここの出版社の本は絶対に取り扱うと決めている本も多くあります。

Q よく売れる本、定番の本はありますか？

A 全生社という、ISBNのついていない本は必ず取り扱いがあります。特に、野口晴哉氏の書籍は他店での取り扱いが少ないため、まとめ買いされるお客さんもいます。また、竜王出版の神智学関連の本は流通が少ないなか、カウンセラーやスピリチュアルを講じる方の中では話題になることがあるため、そのたびに注文が殺到することがあります。

Q 書籍以外にもお香などの雑貨も取り扱っていますが、書籍と一緒に雑貨を取り扱うことに何かこだわりや思いがあるのでしょうか？

A 創業者が、本ばかりだと店員もお客さんも疲れてしまうと言ったことがきっかけです。店内に流れる音楽やお香の香りから感じることもあるのではないでしょうか。本を購入されずに雑貨のみを購入されるお客さんもいます。例えばセージにまつわる書籍を置き、実際にセージをたいてみることができるようにセージを取り扱う、というようにすぐに実践・体験できるように書籍にまつわる雑貨を取り扱うことがあります。

Q 日頃どういったお客様が来店されるのか、年齢層などを可能な範囲でお伺いしたいです。

A 大学生よりも、30代40代50代の女性の方が多く来店されます。店舗の周りにオフィスが多いこともあり、お昼休みに来店される常連の方もいます。そういった方の中には、親しくご挨拶させていただく方もいらっしゃいます。

Q貴店のサイトを参照したところ、様々な分野のパイオニアを対象にインタビュー特集を組まれていますが、インタビュー特集にて取材をする際の取材相手の選考基準は設けているのでしょうか？

A 30年前の開店当時からインタビューは続けていますが、その当時から基準としていろんなジャンルの第一線で活躍されている方にインタビューをしています。なぜなら、そういった方は、ご本人が意識されていなくてもスピリチュアルな世界に触れているのではないかと考えているからです。

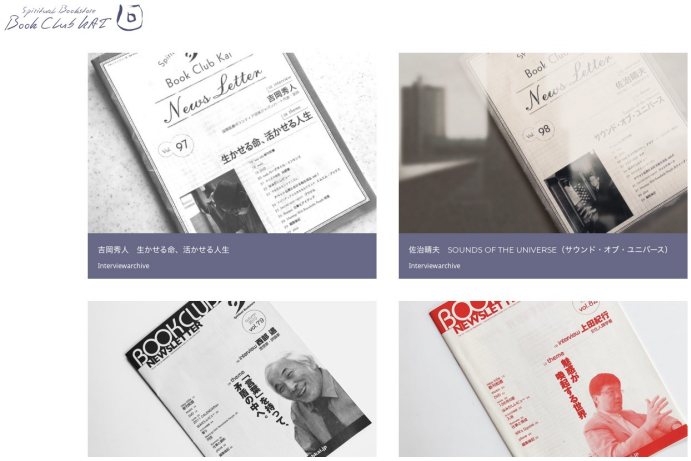
Q 取材する方は、どうやって見つけてくるのでしょうか？

A 書店員が興味・関心のある人や、他の雑誌でスピリチュアルにまつわる発言をされている方にお声がけしています。一般的にインタビューというのは、インタビューされる方が何か作品を発表するといったきっかけが存在すると考えますが、ブッククラブ回ではそうしたことは考慮せずインタビューを行っています。そのため、書店員が関心を持ち、お話を伺いたいと思った方に、メールで数年をかけてアプローチすることもあります。インタビューのためなら、北海道や沖縄まで出向くこともあり、海外の方はメールインタビューをしたりします。海外まで出向いたこともあるんです。

Q 過去のインタビュー*にて「宗教団体や組織に入会しなくても、様々な本をフラットに選ぶことが出来る書店を作りたい」（参考：KOWA COMPUTER 事例紹介 2021年2月1日掲載 https://kowa-com.jp/case/kai-creates/）と答えていいましたが、そう思ったきっかけはなにかありますか？

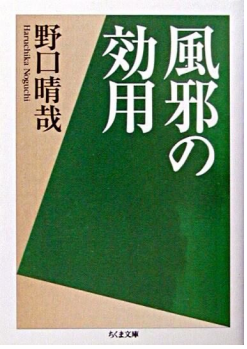
A 今から30年ほど前の開店当時、人間には誰でも自分の内面について向き合う機会があるにも関わらず、スピリチュアルや精神世界といったジャンルが一般的な書店にはほとんど存在しませんでした。そうしたものに触れてみたいとしても、宗教団体や組織に入らないとその願いは叶わなかったのです。宗教団体の世界は閉鎖的であることが多いなか、書店にてそうしたものにまつわる書籍をどんな宗教でも並列に取り扱うことで、気軽に自分に合ったものを手にとって見てもらえばといった考えがあります。そのため、ブッククラブ回はニュートラルに自分で選べる、そういう場であればいいなと思っています。

***インタビュー記事はブッククラブ回の公式HPで読むことができます**



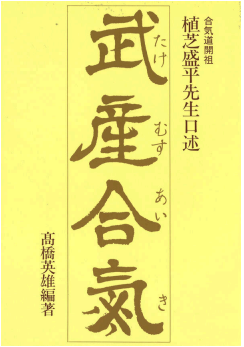
画像出典：ブッククラブ回公式HP https://www.bookclubkai.jp

Qこれまでに読んだ本の中で印象に残っている作品はありますか？



『風邪の効用』野口晴哉（筑摩書房）

風邪を薬で抑えるのではなく、症状や経過を観察することで、自然に回復した時に体が風邪を引く前よりも丈夫になっていることを提唱する本。人間に本来備わっている自然治癒力の凄さが書かれており、内容が斬新で目から鱗でした。

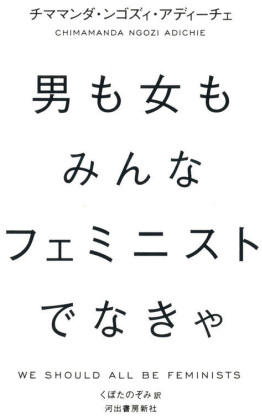


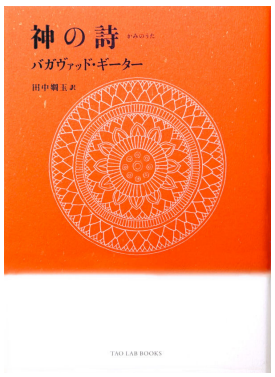
『武産合気』髙橋英雄（白光真宏出版本部）

合気道の開祖、植芝盛平の言葉です。合気道は武道ではあるものの勝ち負けをつけるものではなく、宇宙と一体化することを目的に始まっている。そういった意味では、決して「戦い」ではなく強いて言うなら、「神との戦い」であると言っています。そうした合気道＝アーティストウェイを体現している１冊です。

『男も女もみんなフェミニストでなきゃ』チママンダ・ンゴズィ・アディーチェ（文）くぼたのぞみ（翻訳）（河出書房新社）

もともとのタイトルは” We should all be feminist”であり、この言葉は外国ではキャッチフレーズとして、ハイブランドなどでこのフレーズが採用されたり、アメリカ旅行中にこのフレーズの入ったトートバックを見かけるほどの流行であったが、日本ではそれほどではなかった。書籍自体も字が大きく読みやすい。著者はアフリカ出身の方で、日本の家父長制を引き継いだ現代社会と通じるものが多くある点において似ていると捉えることができる。そうした現代社会を生きる著者が、もし現在の性別分業の通例に逆らって生きていくとどんなことが起こるかをわかりやすく綴った本です。



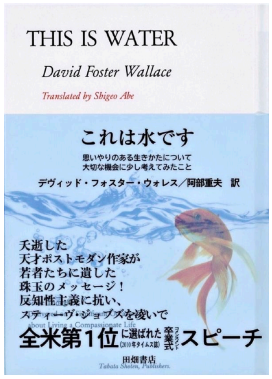


『神の詩　バガヴァット・ギーター』田中嫻玉,（TAO LAB BOOKS）

ヨガをしている人なら読んだこと・勧められたことがあるかもしれないこの本は、ヒンドゥー教およびインドのヨガ哲学における基本の１冊。さまざまな出版社から出されているが、この本は装丁も美しく、ベンガル語の聖典を長く学んだ方が翻訳したものでおすすめです。

『これは水です　THIS IS　WATER』デヴィット・フォスター・ウォレス（著）阿部重夫（訳）（田畑書店）

大学を卒業する学生に向けたスピーチを書籍化しものであり、リベラルアーツについて書かれているため、図書館学や一般教養を学ぶ人に響く１冊です。



画像出典：版元ドットコムhttps://www.hanmoto.com